

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。

阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

## 石灰製造業と十八女用水

### 竹内十郎兵衛

十郎兵衛の養父、竹内勘兵衛は近江国、現在の滋賀県彦根の人物で、1794年頃に四国遍路の途中で太龍寺を訪れた際に、水井村で石灰岩の露頭を発見した。勘兵衛は全国を旅し、鉱物の知識に詳しい人物であった。勘兵衛が四国遍路を終えると彦根藩主の井伊氏に阿波で見つけた石灰岩について報告。井伊氏はこのことを阿波藩主蜂須賀氏に伝え、石灰の製造を勧めたという。蜂須賀氏が勘兵衛に採掘を認めたため、勘兵衛は十郎兵衛を連れ、1794年に加茂谷へやってきた。

水井村に入った十郎兵衛は水井の人を雇い、本格的な石灰の製造

を開始。徐々に成功を収め、毎年石灰十萬俵、利益は500両に達した。

十郎兵衛は石灰業で莫大な利益を得、その利益は地域貢献のため使った。「十八女用水」の建設である。

当時加茂谷は絶えず水不足に悩まされていた。十八女用水は長さ約9キロメートルあり、現在もその一部が残っている。後に用水の恩恵を受けた人々によって十八女の皇子神社境内に顕彰碑が建てられた。

## タケノコ産業・養蚕の発展に尽力

### 東條作太郎

作太郎は1854年に新野町で生まれた。1902年、作太郎48歳の時に村の同志らと「新野筍共同販売組合」を創立。仲買人を通さず組合員自らが出荷するなど共同販売の道を開拓した。このような販売方法は県下で最も早く確立されたものである。さらに1906年には福井村の缶詰所と契約

し、当時としては考えられなかったタケノコの缶詰を販売したことにより新野のタケノコは県下で知れ渡るようになった。

また作太郎は新野町における養蚕業の発展にも尽力した。大正時代には繭の生産量は那賀郡の中でも飛び抜けて多く、新野養蚕王国を築き上げたほどであった。

1932年には新野筍出荷組合員を始め、養蚕業に携わる有志により東條作太郎翁顕彰碑が建てられたが、その翌年1934年に81歳で死去。作太郎の半生はタケノコ・養蚕事業の発展と組合員の農業利益の増加と生活の安定のために力を注いだ人生であった。

## オリンピック

### 齋 辰雄

齋は1904年那賀郡今津浦村（現那賀川町小延）に生まれる。幼少より運動能力に優れ、現富岡西高校時代には陸上部員として頭角を現す。その後、現三重大学に進学し、陸上競技で日本代表候補に選ばれた。

そして1927年の第9回アムステルダムオリンピックに日本代表として出場。齋は陸上十種競技で12位の成績を残した。

1930年には極東オリンピック（現アジア大会）に出場し、見事日本記録で優勝。また日本選手権では1932年までの間、十種競技5連覇を達成する。

1935年からは日本陸上競技連盟理事となり日本陸上の発展に尽力。戦後、本県の陸上競技振興のため、講演会や実技指導に力を注ぎ、名古屋に移住してからも、中央大学の陸上競技部長、同大学体育部長を歴任した。齋の残した尊い経験や指導の記録は旧国立競技場のスポーツ博物館に収められ、その業績が長く顕彰された。

※国立競技場建設のため移転、現在は別施設に保管。

参考資料

「阿南市の先覚者たち 第二集」  
2014・阿南市文化協会

次回(11月号)は、「デイオゴ結城」を紹介します。

問い合わせ

文化振興課 ☎22-1798